

特例子会社「エム・エル・エス」は、日本語力を大切にしています。

株式会社エム・エル・エス
取材記事

ライター 上村 雅代

川崎市立特別支援学校の卒業生で、松屋フーズの特例子会社「エム・エル・エス」に勤務されている村林和明さんと責任者の宮腰智裕常務取締役にお話を伺いました。村林さんは川崎市立特別支援学校で日本語検定 4 級に合格されていますが、当時、ご指導された同校の元校長・山浦秀男先生にもお話を伺いました。聞き手はライターの上村雅代さんです。

株式会社エム・エル・エスは、全国に牛丼チェーンを展開する株式会社松屋フーズの特例子会社として、障がい者を積極的に雇用している会社です。ランドリー事業、洗剤事業、リサイクル事業の 3 つの事業を従業員 106 名（うち 54 名が障がいを持っている）が行っています。

名古屋以東の 840 店舗分のユニフォーム、シャツ、ズボン、エプロン、帽子、玄関マット、ハンディモップまですべてを洗濯するランドリー事業。全国 1,036 全店舗分（5 月 8 日現在）の食器洗浄機用洗剤や中性洗剤などの各種洗剤を、1 トンのタンクから 5 リットルずつに詰め替える洗濯事業。店舗で不要になった厨房機器、食器、備品を回収し、洗浄、部品交換などをして必要な店舗に販売するリサイクル事業。

すべての事業を合わせると、業務は 40 種以上に及びます。そのすべての作業を皆が覚え、どの業務でもこなせるようにしているのだといえます。

入社 3 年目の村林和明さんは、日本語検定 4 級保持者です。自分で 4 級を受けようと決めて、受検する級を決めてから過去問を解いたとのこと。「チャレンジするのは楽しい。認定証を貰えると嬉しい」とその時の気持ちを語って下さいました。ご家族も合格を喜んでくれて励みになったといいます。



村林和明さん

「村林くんは優秀で、全ての業務をこなすんです。最近では納品にも行くなど、さらに仕事の幅が広がっています」

そうお話し下さったのは、常務取締役の宮腰智裕さん。

「納品するときは 2 人きりで行くから、理解力が無いと、一緒に行った人が困ってしまう。納品は相手先とのコミュニケーションが必要だけど、彼は日本語検定に合格したことが自信になっている。社内の勉強会でも何人か手を挙げるうちの 1 人で、積極的に発言しています」

普段の仕事にも日本語力が求められます。業務は一斉指示で行われ、指示書（全てふりがなが振ってある）を読んで、その通りに動く必要があるからです。

朝礼で話した内容は、毎日掲示されます。分からないことがあれば掲示を読み返し、それから全員、ボードを見て、その日に自分が何の業務を担当するのかを確認し、その作業場へ向かいます。



宮腰智裕常務取締役

「今は、自分が何の業務を担当するのか分からない人がいると教えてあげる。皆、優しいから」と村林さん。皆、仲が良く助け合っている、理想的な職場の雰囲気はこちらまで伝わってきます。

次ページへ続く >>>

「人間関係が良好で一人一人が自分をちゃんと出せる職場環境が、品質のよいものを産む」と宮腰さん。実際にシミ一つ残さないクリーニングや、ピカピカのリサイクル品など、良いものが仕上がっていることがその証です。

社員は障がいの有無を問わず、3か月に一度、作業スピードを計り、同じ基準で評価を受けます。結果が給料に反映する仕組みで、これが励みになるそうです。

「（クリーニング事業の作業場を見学して）障がいを持っている人がいるように見えないでしょ？ だから、関係ないんですよ。出来ることは何でもやろうよ、というのがうちのスタンスです」

ここにいると、「障がい者」という括りが空々しく感じられます。その訳を、宮腰さんが教えて下さいました。



松屋グループの瓦葺利夫会長は、「従業員は家族です。だから皆、同じように接しなさい。あなたの子供なら、どう接するの？」と述べられたそうです。「会社の風土は、これに尽きます」と宮腰さん。

「ダメなときはきちんと叱る。その子の将来を考えて叱るんです」

「もしも家族・兄弟だったら、どんな接し方をするだろうか。」と瓦葺会長が言われたことを常に思い出すのです。

「会社を辞めても地域の中で暮らしていけるように、いろいろ教えています。65歳で定年を迎えた後、地域に受け入れてもらうための儀式。それは『あいさつが出来ること』。こんにちは、ありがとう、さようなら。たったそれだけで生活が出来ますから」

どんな企業でも、あいさつをないがしろにする会社は得てして雰囲気良くないものです。私の取材に笑顔で答えてくれた村林さんをはじめ、従業員の皆さんの気持ち良いあいさつに、気付けばエム・エル・エスの大ファンになっていました。

あいさつひとつで人は笑顔になれます。たったそれだけで暮らしていけるといいます。言葉が生きる糧になる。「言葉の持つ力」を、改めて感じました。



山浦秀男先生

村林和明さんの出身校、元川越市立特別支援学校長山浦秀男先生（現、埼玉大学・共栄大学非常勤講師）に、日本語検定をどのような経緯で導入されたのかについてお話を伺いました。

「しつけや勉強が身につくのは、自己肯定感という土台があってこそ。自分が必要とされている、自分には価値があると思える自己肯定感こそが『生きる力』そのものです」と山浦先生はおっしゃいます。

「子どもに関する事件が起こると、『今の子どもは何を考えているのかわからない』、『家庭の教育力が落ちている』、『しつけがなされていない』といった、今の子どもを否定するような言葉が多く聞かれるが、現場で関わってきた立場から言いますと、問題の根っこはそこではなく、子どもたちの自己肯定感の極端な低さではないかと感じている」と山浦先生。

先生は校長として、子どもたちに自己肯定感を身に付けさせるために、「自分を評価し受け入れること」「自分の意見をしっかり言えて自己決定できること」「人間関係の中でしっかり生活していると感じること」に重点をおき、学校経営を進められたそうです。そのための手法の一つとして、「日本語検定」を学校として導入したとのこと。団体受検してから2年目で、4級に合格した生徒の努力には驚いたそうです。

山浦先生が川越市教育長時代、就職のお願いに伺った折、「我が社の理念は、従業員は家族。だから皆同じように接しています。仕事ができない人がいたら、その人に合う仕事をつくっています。安心して生徒を我が社にあずけてください」と言われた言葉が忘れられないそうです。



上村雅代（かみむら まさよ） プロフィール

ライター。1980年8月7日生まれ。芥川賞作家・荻野アンナ氏の助手として働きながら文章の研鑽を積む。『大震災 欲と仁義』荻野アンナとゲリラ隊（共同通信社）共著。現在、息子（4歳）の育児奮闘中。

芥川賞作家・荻野アンナさんの助手をつとめる傍ら、多くの作品をプロデュースし、最近では、人気アイドルグループNMB48のラジオ番組のシナリオを担当する等活躍中。